南北朝後期における室町幕府政治史の再検討 上

康暦の政変以前の「斯波派」・「細川派」をめぐって

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>山田 徹</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>文化学年報</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>66-88</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2017-03-15</td>
</tr>
<tr>
<td>権利</td>
<td>同志社大学文化学会</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.14988/00027578">http://doi.org/10.14988/00027578</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
南北朝後期における室町幕府政治史の再検討

山田 徹

南北朝の動乱を前に権力確立を果たせずにいた室町幕府であったが、三代目の足利義満の時代に最盛期を迎えることとなった。この義満の権力確立に至るまでの南北朝後期の政治史について、現在に至るまで最も影響力を持ち続けるのが、五〇年ほど前に刊行された、佐藤進一『南北朝の動乱』である。佐藤は本書で、南北朝時代後半の政治史の理解のために、次のような二つの文脈を提示している。第一に、室町幕府内における『斯波派』・『細川派』という守護府の党派抗争という文脈である。貞治五年（一三五五）に斯波高経・義将父子が没落したのち、反斯波派に擁立されて細川頼之が管領に就任したと佐藤は理解し、その争いが強く影響を与えるものとみなした。そのうち、明徳年間（一三九〇～九四）に『斯波派』の山名氏・土岐氏が討伐を受ける頃までの政治史を、このような対立構造の延長線上に読み解くのである。
この佐藤の見方の特徴は、『このような守護の連合は、一見そこではなくとも有力守護だけの問題のように見えるが、
降、基本的に二つの陣営のどちらかに属していたと理解する点にある。ここでは、平時はどちらに与せず、決裂す
るまでにそのときまで旗幟を鮮明にしない中間的勢力は想定されていない。佐藤は、守護職の任免や、遙って観応
策乱の去就などを参考にして諸大名を二陣営へと分かれ、それによって『斯波派』『細川派』の対立という構図
を強調したが、かかる理解は小川信にも継承されて通説化され、あたかも自明なものであるかのように現在も広く流
布している』

第二項、佐藤の名論文『室町幕府論』で詳しく論じられた(4)、室町幕府将軍権力の確立という文脈での
ズームも守護たちから絶対的に隔絶した存在ではなかった将軍権力は、①直轄軍たる奉公衆や直轄領たる御料所の整
備、政所・侍所の直轄機関化、直轄都市たる京都の掌握などを通じて、守護に依拠しない直轄的な基盤の構築に努
けていったとされている。これらの論点に関してはまだまだ批判もあるが(5)、対朝廷関係の問題が、守護たちに対
する将軍権力絶対化の手段として位置づけられていることはたらいへん特徴的であり、その点は現在も受け継がれてい
もちろん厳密にいえば、佐藤自身は、康暦の政変の結果として義満の権力確立が進展するとは明言していない。しかし、小川信が「かれ自身が斯波派の運動を利用して即位の後見という東縄を断ち切ったという意味をもっている」政変ともに義満はみずから幕府の主導権を掌握して将軍専制体制確立の第一歩をこなした。この政変は、その効果が

よって、佐藤の説に由来するこのような政治史理解については、その後の研究成果を考慮すると、疑問符をつけ部

分が多い。

まず康暦の政変以前に関しているとすれば、もちろん大名の抗争が、室町幕府に危機をもたらし、大名間の対立が進化するのだろう。これは、圧倒的な実力、重要な要衝を巡る争いである。そして、この争いは、後に斯波派の権力体制の確立をもたらすものであったことが理解できる。

しかし、この指摘に学ぶところは大きい。実際に筆者が検討したところでは、細川頼之執政初期の紛争では、反細川派の勢力が強い。大名が斯波派を中心に紛争していた徴証を確認できなかった。そもそも、弱小守護も含めたすべての大名が

強い。
二陣営に分断されている、という理解を前提にしてしまうこと自体、かなり極端で、危ういことといわねばなるまい。

次に、康暦の政変以後について。まず気にかかるのは、政変以前に比して、この時期に大名間で生じた騒擾が視野に入れることが少ない点である。義満の権力確立を考える場合、そうした騒擾をしっかり位置づけておく必要はないと論じた。**

また、筆者は以前に、佐藤が直轄軍と呼ばれる公家軍の問題に関連して、在在京して将軍宮三府殿へ直接奉公する在職直轄軍が身分をもらったからと説明した。在職直轄軍が形成される過程について検討した。検討の結果、そうした集団は、戦乱がひどくおさまった政変によって新しくみられたもので、それが「御料所」として安定する時期は、明徳から応永初年にかけてであると結論づけた。

**ここのような要素が姿をあらわしてきたのが南北朝時代であった。**

結論づけに近い結論に落ち着いたというのは、ここで強調しておきたいのは、こうした要素の形成がたびたび起こったことを示す。
第一章
細川頼之執政期の大名間対立

康暦の政変の概略

まず、幼君義満を補佐して政務にあたっていた管領細川頼之の、康暦元年（二三七九）閏四月に反対派の動きを受けて失脚し、分国へと下向した政変をすなわち康暦の政変の経緯について、筆者が調べておきたい。

山名義理・氏清・時義兄弟が紀伊へ出兵していたほか、増福寺の要請を受けて南都（奈良）へも出兵した佐々木義将・吉見氏順・富樫昌家・赤松義則・土岐義行（頼康の猶子で嫡男）の康暦元年三月二日に、京都で細川頼之を追討しようとする騒動が起こったが、政局の端緒である。これを受けて二三日、土岐頼康追討の命が諸国に出され、おそらく佐々木吉高秀の追討もこれと同時か、直後あたりに出されたものと考えられる。義満は南都出征中の諸将に帰洛を命じたが、このうち斯波義将と土岐義行の二人は一
旦行方をくらました卵一人のうち義将はほどなく帰洛したが、土岐・佐々木京極両氏に討伐軍が派遣されることとなる。佐々木京極秀秀討伐は佐々木六角満高、土岐親康討伐は「山名・赤松・富樫以下」が命じられたようである。赤松は赤松義則、富樫は富樫昌家で、山名は紀伊出兵が確認できない義幸（義理ら兄弟の長兄師義の子）、相撲家が花の御所を囲むに至り、義満も妥協を余儀なくされ、義隆に下向を命じた。義隆は弟義元、従兄弟義春らともに、四国へ下向することとなり、この月末には、新たな管領に斯波義将が任じられた。

以上が、康徳の政変の概略である。通常いわれるように、土岐親康・義行・直氏、佐々木京極秀秀、そして斯波義将が提携して引き起こしたと考えてよい。冒頭にも述べたように、本章ではこの康徳の政変以前に、佐藤・小川の想定する「斯波派」・「細川派」が本当に存在していたといえるのかについて検証をおこなうが、まずは康徳の政変で反細川の動きをはっきりさせたこの三氏の検討から、始めるということとした。
二 「斯波派」再考

斯波・土岐・佐々木京極氏

細川頼之没落に主導的な役割を果たした三氏のうち、土岐頼康については、佐藤に評価のふれがあるため、注意が必要である。佐藤は「南北朝の動乱」で、当初「細川派」だった土岐・佐々木（京極）両氏が、頼之との対立を経て「斯波派」へ転向するとの流れを示していた。ところがその一方で、二年後の室町幕府守護制度の研究、上「伊勢」では、土岐頼康が貞治五年（一三六五）の斯波高経没落に後追いして伊勢守護職を失っていることに着目し、「康徳間の党派区分をそのまま貞治間に適及させる」という規模が不十分といわゆる「細川派」といえるほど間接が深かったと懸念している。応安四年（一三七二）初頭に皇位継承問題をめぐって決裂し、評定衆が対立を深め、応安三年（一三七〇）末、斯波義将と頼之の対立がはっきりと始まるのは、同じく永和三年（一三七〇）六月の慶中国における紛争である。「応安四年（一三七二）初頭に皇位継承問題をめぐって決裂し、評定衆が対立を深め、応安三年（一三七〇）末、斯波義将と頼之の対立がはっきりと始まるのは、同じく永和三年（一三七〇）六月の慶中国における紛争である。佐々木京極氏の問題を契機にしている。この年八月に斯波義将と細川頼之が対立に及んだ際、「頼之両方大名等可
見継ぎ、可及天下珍事々々という風聞が流れているように、斯波義将を支援する大名が存在したこと自体は事実であり、そこで土岐・佐々木京関両氏が含まれていた可能性ももちろんある。しかし、これ以前に、この三氏が反細川を掻げて連合していた微証はなく、ここでは細川頼之が政治を執るなかで、彼に反感を持つ勢力が段階的に増えている、という史料にみえるままの状況を、確認しておくことしたい。

山名氏
先述の三氏と異なり、最も早い段階から細川頼之と対立している微証があるのが、山名氏である。山名時氏は、早くも貞治六年（一三七六）九月七日、頼之が多数の軍勢を引き連れて上洛した際に、「就之、山名又鬱懐。天下之乱可出来之由、有不快感を流れていた。また応安六年（一三七五）にも、大樹仏事令結願者、世上可類乱之由、関係と説有之。随而諸國軍勢等悉駕上京都、風聞。是山名右衛佐在道與執事不和之故云々。其間経縦、不退委退」とあるように、時氏死後その跡を継承した義義が、細川頼之と対立しているようである。山名氏が細川氏を嫌うのは、戦国を交えてきた経緯があるためと考えてよく、最も早い時期から対立がみえるのはそのためだろう。

ただしそれは、注意しておきたいのが、山名・斯波両氏の関係が史料上にみえてこない点である。康暦の政変時も、山名一門のうち義義・氏清・時義兄弟が紀伊方面に出兵して不在だったこともあり、京都に残っていた山名氏（先述のように義義と推測される）は、斯波・土岐・佐々木京極氏に積極的に拘束することなく、むしろ義義の命を受けて土岐氏の征伐にあたっていた。次章で述べるように、急遽京都に戻ってきた時義義が細川頼之討伐に出立して以降、反細川の強硬派となっているため、そのような性質
格を持ち続けていること自体は間違いいない。しかし、斯波氏との連携という性格は、以後もそれほど明瞭にみえてく
るわけではない。
一般的には、斯波・山名両氏がともに直義派に属していた点が、強調されることが多い。しかし、尊氏・義詮派の
内紛についてよく知られているように、たとえ観応の揺乱時にも同様に属していたとしても、その後も政治的連帯
が続けるとは限らない。
加えて、観応の揺乱以前からのご「直義への接近」が強調されることもある斯波高経（義将の父）だが、彼が揺乱
に、戦況はつつきと直義優勢に傾いてから投降しており（
）ない。この点は山名氏時も同様である（
）。直義派と
いうよりも日和見的存在であった。その二観応二年（一二五〇）七月三〇日夜、直義が京都を脱出して越前へ逃れ
た際、高経は直義と行動をとらしにした（
）。この時期、直義が高経分国の越前に逃れたのは、日和見的な高経への信頼がよかったよう、その時期に於っては
斯波高経が直冬・時氏らに味方したのは、越中の土井直常が文和三年（一二五四）二月に大軍を率いて上洛してき
たときのものであり、その後も一年ほど経った文和五年（一二五六）正月には幕府へ降参している（
）。

南北朝後期における室町幕府政治史の再検討（上）
以上のようにして、斯波高経が直義・直冬に就任した時期は、非常に対応された時期といえるが、そこで注目したいのは、このように斯波高経が幕府の動きを明白に取ったのか、二度とも、北陸方面に直義・直冬派の勢力が伸張した時期だった点である。高経は、分国南面を失わないために直義・直冬に一時的に属しているという色合いが強く、生前の直義・直冬派と理解すべきではないのである。

しかし、微妙な動きを取ることもあり、斯波氏が幕政を握ったことが、山名氏の復帰しやすい素地を作り出した面もあったかもしれない。しかしこれによって、斯波氏と山名氏の間に深い関係が構築されるかどうかは別の話である。

この時期の山名・大内兩氏に「斯波派」というレッテルを与えていることは、彼女に関しては、細川頼之が皇位継承問題で後光厳天皇支持の立場を表明し、大名間対立が引き起こされた時期の次の史料がよく知られる。

史料(前後)：頼之在内申云（以光肅僧正先日申之）、立坊事。依被仰下。已可為聖断之由。奏聞先了。云：勅状之趣。云武家所存、雖正理勿論、武将幼主、大方（義満淮母）每時諮詢事間、諸大名等又委不知子細、偏頼之以未盡事。称公家晶層之由。於身雖不痛存、御領以下始諸事、旧院有被申置之由承之。然者被許拜見、且蜜々可命令大寺鑑能以下之由存之。可為何様之由、申之。…（後略）

この史料は、ほかならぬ皇位継承問題の当事者、後光厳天皇自身の日記である。細川頼之が、立坊の件については
『散断するべきである』（天皇の意に従う）と後光厳天皇に奏聞していたが、渋川幸子のもとで名をたて、『親が後光厳を駆逐している』と主張していた。それを受けた細川頼之が、『光厳院（旧院）の置文がある』と聞いてから、従来の研究では、この事例にみえる頼之の動きに反対する人々が「斯波派」と解し、渋川幸子がそうした大名たちの中心にあったと考えられてきたようである。

このほかにも渋川氏に関しては、（a）『貞治四年（三六五）に幸子の甥にあたる渋川義行が九州探題に任命され、その後をその後を重ねて、 Trombon のような動きを模倣していることが、（b）後進今川貞世が九州探題を、渋川幸子・義行が「斯波派・義行は」に属していたとしてきたのである。しかし、家族史研究の成果が示すように、当主が早く亡くなり、幼年者がイエを継承する場合、前当主の妻である『後家』がイエの中核となって重要な役割を果たすのは、中世において一般的なことである。大切な幸子は義満の実母ではないし、義諱の正室として義満の准母となっており、彼女が果たしていたのはまさにこの『後家』の役割である。

彼女が政治に携わり、「事実」に関与するのはごく普通のこと、大名たちが細川頼之の判断への異議を彼女のものに申し立てるのも、まったく自然ではない。この史料から、彼女自身の反細川という立場を読み取るのは、読み込みすぎといわねばならない。

【渋川氏略系図】

渋川直頼 → 義行 → 満頼

[足利義詮 → 資満]
それ以外の点については、どうだろうか。（3） 渋川義行の九州探題派遣について、義詣の没後、すなわち渋川
幸子が足利将軍を代表すべき「後家」に受け取られた直後の時期には、大将派遣が取消される節がある点が注目さ
れる。これを素直に受け取るならば、渋川幸子は、甥義行の九州探題派遣を、幸子ではなく、むしろ妻の一族を重用
しようとする義詣の意志だったのではなかったのだろうか。

佐藤進一は、足利義詣について「何一つとりえのない凡愚な亡夫義詣」と述べている（36）ように、義詣の能力や主体
性を過少に評価する傾向があり、その反動で幸子の政治的主体性を過大に評価しているようか危われる。現在では、
義詣の主体的な志向性を評価する論考も多くあらわれており（35）、佐藤のような先入観にとらわれる必要は
ない。そうした点を考慮すると、義詣の探題派遣を斯波氏との関係のなかで評価し、同じく対象を細川隠之による「斯波派」
制とみなす佐藤説には、容易に賛同できないのである。

このほかの諸点をみてみると、（b）は康暦の政変直接のことである、（c）はそれよりもさらに後年のことであ
る。そして（d）においても、渋川満頼の生年が応安五年（一三七〇）である（35）ことを考えると、婚姻の時期が康暦
五年（一三六八）、斯波高経没後直後に細川隠之令政期前半にまでさかのぼる根拠は、存在しないといわねば
ならない。
南北朝後期における室町幕府政治史の再検討（上）

川村貞世（了俊）である。彼は（b）細川頼之執政期に九州援助として派遣されていること、（c）細川氏が没落した頃の政変に前後して、分国たる備後を失っていること、（d）って応永二年（一三九五）彼が九州援助の職を解した点などから、一般的に「細川派」と推測されてきた。

しかし、（e）については、九州援助への補助が必ずしも大名側に望まれていたわけではなく、という先述の点のほか、第二の補助を求めていたとの点もある。（f）徳元三年（一三九〇）九月、頃の山名氏が討伐されていた時期に、同じく貞世の分国である安芸国への新田前線の調整を指示した点もある。このため、細川追討、山名追討という軍事的必要が生じた際に、守護職が他的人物に渡されると理解しておけば、この点の点でしょう。したがって（b）も、彼が「細川派」だったことを証拠にはならないう、以上の諸点を考慮するならば、九州派遣以前の今川貞世と細川頼之の関係の深さを積極的に論証する証拠は、ないといわなければならない。

また、（c）も後の動向であるため、決め手にはならない。以上の諸点を考慮するならば、九州派遣以前の今川貞世と細川頼之の関係の深さを積極的に論証する証拠は、ないといわなければならない。
一方、貞世は、顕徳以外との関係も指摘できる。とえば、系図図によれば、彼の妻は、土岐頼康の弟である顕徳の娘である。

また、貞世は冷泉為秀を和歌の師としていたが、佐々木清光高秀も為秀の「門弟之団」であった。貞世の直後に、斯波若之を中心とする小倉派があったとはいいえないこと。また細川頼之を

以上の、貞治五年（一三六六）の火災の直後から、貞世は、斯波若之を中心とする小倉派を反対する理解に基づいて、貞治五年以後の政治史を「斯波派」と対

「細川派」という二つの陣営の抗争とする理解に対して、批判を加えてきた。つまり、貞治五年以後の政治史を「斯波派」と対

四《突出への衝突》

以上、貞治五年（一三六六）の火災の直後から、貞世は、斯波若之を中心とする小倉派を反対する理解に基づいて、貞治五年以後の政治史を「斯波派」と対

「細川派」という二つの陣営の抗争とする理解に対して、批判を加えてきた。つまり、貞治五年以後の政治史を「斯波派」と対

的結果があらわれたものとみなす、などといった危うい諸点を前提にして語られてきたものであり、確実な議論とは

史料にみいだせるところから、この時期の政治史を再構成するならば、細川頼之が政務を取るなかで、反感を持つ大
西南朝後期における全町制政治史の再構成（上）
このような行動原理は適って観応の混乱を説明するのにも有用と思われるが、かかる行動原理が政治史の根幹から定義していたというのは、やはり同輩の有力者を駆逐しつつ将軍家を傀儡化し、幕府の実権を握った北条氏（のうちとくに得宗家）が、武家政治の歴史的前例として重要な位置を占めていたためなのだろう。しかし、冒頭にも述べたように、この明代の政変の前後あたりの時期を境にして、状況は大きく変わっていく。次章では、政変以後について諸事象を整理しながら検討を進め、この時期の政治史的展開を描き直していきたい。

近年の研究でも、安田次郎『政変と歴史的社会の形成』（岩波書店、1989年）、初出『九十五年』、佐藤一「日中事変の歴史的社会的基盤」（史学雑誌）を参照せよ。
ただ、『母子秋高範』とされる江の湖のようが義馬の後継者となっていることを考えると、少なくとも当初のある。

『後言略記』（貞治六年九月七月日）

『後言略記』（貞治六年二月二日日条。ただし、このときには無事平和がなされ、軍兵も下国いたのである。

『三太営略記』（貞治三年二月一日日、四月二日日条）また、『大日本史料』正平七年三月二日日条所さん、柳原所蔵文書にによれば、

四月に八幡を攻撃した際に、山名師義が従軍していたようである『大日本史料』正平七年四月二五日条。

国太営略記文平五年正月九日条。

この時期の大内氏では、分国区間で勢力拡大を図ろうとする弘山と、幕府や九州探題に積極的に協力しようとする嶋男義弘との間に路線対立があったとされている。弘山と、幕府守護制度の研究、下巻東京大学出版会、一九八八、『一見』の項。ただし、仿藤華一は、新たな守護を弘山と認識しているが、大内氏研究の成果（松岡久人『大内氏の研究』清文堂出版、一九七一年、四月七日、藤井崇『室町幕府大名権力論』同成社、二〇三年、周五頁）によると、還付されたのは義弘を考えるべきであろう。すなわち、幕府に協力的な姿勢を
南北朝後期における室町幕府政治史の再検討（上）

下したのだとしても、このことはそれ以前に彼が「斯波派」であったことをただちに証明するものではないのである。

また、前任官等荒川氏の終見が永禄四年（三七九）三月であることを考慮すると、石見国守護職を退任する判断を示す義弘への優遇措置と理解されるのであり、もし康暦の政変の結果、斯波義将が義弘に石見国守護職を退去する判断を下したのだとしても、このことはそれ以前に彼が「斯波派」であったことをただちに証明するものではないのである。

康暦元年（三七九）閏四月。以前、すなわち細川頼之執政期の措置である可能性も残っており、注意が必要である。義弘がこれ以前に協力し続けていた幕府とはまっすぐに細川頼之執政期の幕府であったし、下って明徳の乱で山名氏清を迎え撃つ際艦し、有才な人物が手を組んでいたとされている「難太師記」が、それ以前の大内義弘に軽々しく「斯波派」のレッテルを与えるべきではないだろう。

「北朝遺文九州編」四七〇号（貞治六年）一月八日付細川頼之書状写、四七二号（貞治六年）一月二日付細川頼之書状写、四七二号（貞治五年）一月二日付細川頼之書状写（ともに「後記阿蘇家文書」。なお川添昭二「今川家伝説」）《東アジアと日本歴史編》吉川弘文館、一九八○年、七二頁も参照。

「叡陽殿御記」安和三年一月一日。　

「松山県史」後家の力（中世を考える）家族と歴。吉川弘文館，一九九四年。

「平記を読む」吉川弘文館，二〇〇八年。石原比伊吕室町時代の将軍家と天皇家（勉強出版，二〇〇五年）など。ただ、個々の議論で挙げられている具体的な点については、逆に義詣への遺留評価の傾向があるような印象も受ける。今後、細川頼之のみせたこのような動きに対して、細川義家が警戒していた可能性があると考えているが、詳しくは別の機会に。
南北朝後期における室町幕府政治史の再検討（上）

後患味記

康徳元年四月一日条。

『幸平用土夫略集』

康徳二年五月三日条。

『迎陽記』

康徳二年四月二一日八日条など。

【注58】

今、この記述は、本の南朝軍の制圧しきる軍事力であったろう。あとは、あえていえば、源貞朝護要を表の子に継承させた貞世を潰しの部品にいう「難太平記」の記事が残る程度である。

後深心院関白記

応安五年六月一日条。

『二条良基研究』

応安五年六月二日条。

『二条良基研究』

応安五年五月一日條。

『二条良基研究』

応安五年五月一日條。

『二条良基研究』

応安五年五月一日條。

『二条良基研究』

応安五年五月一日條。

『二条良基研究』

応安五年五月一日條。

『二条良基

の変故については、小川剛生『二条良基研究』

を参照のこと。

なお、小要説『仁木義長排除事件覚書』

日本歴史　三五六号、一九七八年では、延文五年（三三〇）の仁木義長没落事件に関して、佐藤木の京極高氏ではなく、細川義高が中心であったと指摘している。